

CONTENTS

- | | |
|--|---------------------------------|
| ● 第9回NAMMビジネスツアー AMEI/MMA合同会議 開催報告 1・2・3 | ● MIDIライセンサー カンファレンス開催 5 |
| ● MIDI検定試験実施結果報告 4 | ● メディアコンテンツ委員会 技術セミナー 6・7 |
| ● 中国におけるMIDI検定3級試験実施報告 5 | ● AMEI会員名簿 第10回通常総会と懇親会開催のご案内 8 |

第9回NAMMビジネスツアー

AMEI/MMA合同会議 開催報告



AMEI/MMA合同会議



左：平野勝彦AMEI専務理事 右：トム・ホワイトMMA会長

当協会のMIDI規格委員会が主催する第9回目のNAMMビジネスツアーが、米国NAMMショーの開催期間に合わせて実施されました。

今回は、会員会社から計16社の参加を得て、事務局担当と合わせて17名のグループツアーとなりました。



ツアーメンバー

1月18日(水)、成田空港ロビーにてメンバー紹介を兼ねた参加者ミーティングを開催後、業界関係者で満席のフライトで出発。アナハイム・コンベンションセンターにて開催されたNAMMショーを丸4日間にわたって視察し、ツアーメンバーの一部は米国MMAとのマリオットホテルにおける3日間・3回の合同会議にも参加し、1月24日(火)、全員無事に帰国しました。

AMEI/MMA合同会議 開催報告

1月21日(土)

AMEI/MMA 合同会議

NAMMショー期間中の1月21日(土)に、恒例となったAMEIと米国MMA(MIDI Manufacturers Association)の両関係者約20名による合同会議がアナハイム・マリオットホテルの会議室で開催されました。この会議は例年、両団体の懸案事項について議論する場であり、今回もMIDI Implementation Chart、DLS(Down-Loadable Sound)、電子透かし、モバイルMIDI関連についての議論がなされました。また今回はMMA側から、主にアコースティック・ピアノをMIDIでコントロールする場合の高分解能ベロシティ対応についての話があり、両団体で活発な議論が交わされました。



AMEI/MMA合同会議

1月22日(日)

MMA総会

翌22日(日)は、MMAの年次総会が開催され、AMEIからのツアーメンバーの一部もオブザーバーとして出席しました。

一般セッション、テクニカル・セッションでは、MMA会長のトム・ホワイト氏の挨拶から始まり、粛々と議事が進行しました。テクニカル・セッションの最後にHD-MIDI(High-Definition MIDI)に関する質疑応答があり、ここでは白熱した議論が展開されました。HD-MIDIとは次世代のMIDI規格で、AMEIとMMAの間で検討が進められており、MMAではワーキング・グループを作って検討しています。

午後にはMMAのワーキング・グループが開催されました。MMAの会員は米国全土に散在し、通常のワーキング・グループの活動は主にメールで行われているため、彼らにとってMMA総会はメンバーが集まる唯一の公式ミーティングと言うこともあり、ここでも活発な議論がなされました。

MMA総会スケジュール

- 1 一般セッション
 - 08:00~09:00 AMEI/MMA合同朝食会
 - 09:00~09:15 MMA事業報告(2005年レビュー)
 - 09:15~09:55 HD-MIDIの紹介
 - 09:55~10:00 役員選出
- 2 テクニカル・セッション
 - 10:10~11:30 ワーキング・グループ報告、技術提案審議
- 3 アフタヌーン・セッション
 - 13:00~14:45 HD-MIDI Working Group
 - 15:00~18:00 Mobile MIDI Working Group



MMA年次総会





オプションツアー

今回のツアーで4度目になるオプションツアーは、ロサンゼルスダウンタウンのど真ん中に2003年に完成した、建築家 فرانク・ゲーリー氏の設計による全く



新しい感覚の音楽ホール“Walt Disney Concert Hall”を見学しました。このホールはロサンゼルス交響楽団のフランチャイズでもあります。その斬新な設備、ホール全体のユニークな外観を持つ建築設計に加えて、外壁のすべてが100%ステンレス製という、これまでにないアメリカらしい新感覚の音楽ホールを目の当たりにして、一同心を洗われるような印象を受けました。

次回以降のツアーでも、NAMMショー自体の視察に加えて、ショーだけでは実感しにくい米国の楽器関連ビジネスの実態を体験すべく、新たな企画を準備することも有意義なことでしょう。

(注: 残念ながらリハーサル中のため、メインホールは見学出来ませんでした。)



ツアー参加者アンケート

1 NAMMショーの感想は?

- 雑誌等で概要は知っていたが、実際に来てみると多くの出会いがあり、大変勉強になった。
- 有名ミュージシャンを含め、たくさんのデモが見られたが、日本と違い、出展者が楽しんでいたように思う。
- ツアーに参加した他社の人たちと情報交換できた。
- 楽器だけでなく、ライティングやPA関連の展示も多く、多くのガレージファクトリーが展示しているのにも感動した。
- ビギナー向けとプロ向けの製品で2極化されていると感じた。
- 英語には不自由した。
- 民族楽器（特にアジア系）やパーカッションの展示がとても充実していた。
- DAW（Digital Audio Workstation）のプレゼンが充実していた。
- 出展社が、思っていたより少なかった。
- 業者だけしか入場できないのに会場がごったがえしていたのには驚いた。

2 どんな展示品が印象に残った?

- コンピューターベースのソフト音源やプラグインなどが多彩で充実していた。
- 電子ピアノにPC画面とPCキーボードが組み込まれていたもの。
- メロトロン of 復刻版
- HakenAudio社の「Continuum Fingerboard」は、MIDI 1.0にもまだまだ未開拓の活用分野があることを認識させられた。

3 期待はずれのこととは?

- ウォルトディズニーコンサートホールでメインホールを見学できなかった。(多数)
- ホテルは期待はずれだった。(会場から遠い、飲食設備が不十分、サービスが良くない、周辺に何も無い等)
- 日常生活用品が買える店舗に立ち寄れる機会が欲しかった。

4 その他、お気づきの点は?

- ツアーメンバーの皆さんともっと交流したかった。
- 次回以降のオプションツアーの候補として、アカデミー賞授賞式を開催するコダックシアターを推薦。
- NAMMショーに関する情報や会場周辺地域の情報を事前にAMEIから提供して頂けると嬉しい。
- 米国における楽器関連製品の流通形態などが分かる見学を企画しても良いのではないだろうか。

MIDI検定試験実施結果報告

主催：社団法人音楽電子事業協会 協力：日本シンセサイザー・プログラマー協会

平成17年12月4日(日)全国81会場にて「第8回MIDI検定3級」「第7回MIDI検定2級1次(筆記)」を実施しました。また同日、同一試験問題にて中華人民共和国においても「第2回MIDI検定試験3級」を実施しましたので、あわせて報告いたします。

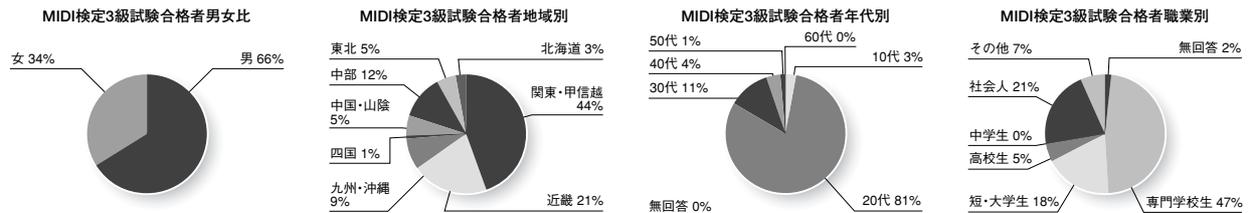
全国協力校・試験会場

- 東京・関東地区
アイデックス・ミュージック・アカデミー
音響技術専門学校
神奈川情報文化専門学校
菅原学園 専門学校デジタルアーツ東京
代官山音楽院
東京工科大学
東京スクールオブミュージック専門学校
東京スクールオブミュージック専門学校 渋谷
日本工学院専門学校
日本工学院八王子専門学校
日本電子専門学校
パンスクールオブミュージック
音楽学校 メーカー・ハウス
ヤマハ音楽院
専門学校東京ビジュアルアーツ
東放学園 専門学校 東放ミュージックカレッジ
横浜デジタルアーツ専門学校
国立音楽院
アカデミー・オブ・ミュージック Hits Village New York
- 新潟地区
新潟会計ビジネス専門学校
- 東海地区
大垣女子短期大学
名古屋音楽大学
名古屋芸術大学
専門学校 名古屋ビジュアルアーツ
リュウケイミュージック ネット
コンピュータ総合学園HAL
- 大阪・関西地区
神戸山手短期大学
キャットミュージックカレッジ 専門学校
株式会社JEUIGIA三条本店
コンピューターミュージッククラブ Dee
コンピュータ総合学園神戸電子専門学校
ビジュアルアーツ専門学校大阪
ヤマハ音楽院大阪
ヤマハ神戸店
- 岡山地区
くらしき作陽大学
- 広島地区
広島コンピュータ専門学校
広島工業大学専門学校
- 四国地区
愛媛電子ビジネス専門学校
ヤマハミュージック瀬戸内
- 北陸地区
金沢科学技術専門学校
アイビー学院 アイビーテクノカレッジ
- 東北地区
菅原学園 専門学校デジタルアーツ仙台
日本コンピュータ学園・東北電子専門学校
専門学校日本ビジネススクール仙台校
- 福岡地区
専門学校九州ビジュアルアーツ
福岡マルチメディア専門学校
福岡スクールオブミュージック専門学校
- 札幌地区
札幌音楽学園 札幌サウンドアート専門学校
札幌琴似工業高等学校

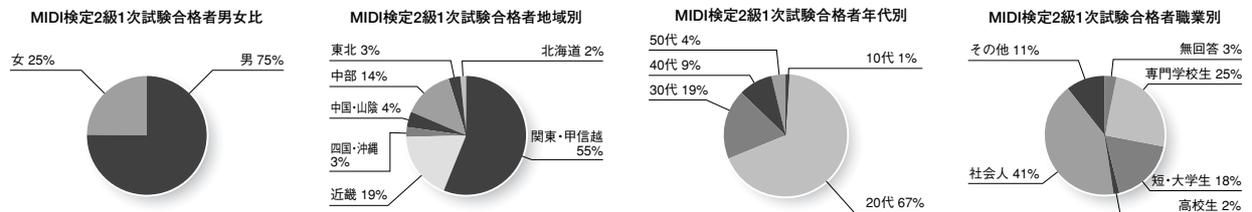
●島村楽器全国32会場

- | | | | | | |
|----------|---------|--------------|----------|-----------|------------|
| 札幌パルコ店 | 水戸マイム店 | 千葉パルコ店 | 松本パルコ店 | 岡山ロッツ店 | 宮崎イオン店 |
| 釧路イオン店 | 大宮ロフト店 | 成田イオン店 | 名古屋パルコ店 | 広島パルコ店 | アミュプラザ鹿児島店 |
| 仙台イービーズ店 | 新所沢パルコ店 | 川崎ルフロン店 | 奈良店 | 福岡イムズ店 | |
| 郡山アティ店 | 新宿PePe店 | 横浜ビブレ店 | 京都カナート店 | 熊本パルコ店 | |
| 太田イオン店 | 八王子店 | 新潟ビルボードプレイス店 | 神戸三宮ビブレ店 | 大分フォーラス店 | |
| 宇都宮パルコ店 | 津田沼パルコ店 | 金沢ラプロ片町店 | 泉南イオン店 | アミュプラザ長崎店 | |

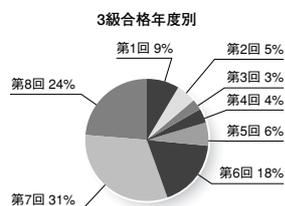
●MIDI検定3級試験合格者分析 受験申込者：1469名（うちWEBからの申込み257名） 合格者：1056名（合格率 71.9%）



●MIDI検定2級1次試験合格者分析 受験申込者：429名（うちWEBからの申込み111名） 合格者：189名（合格率 44.1%）



●第7回MIDI検定2級2次試験（平成18年2月実施）受験申込者の3級合格年度



中国におけるMIDI検定3級試験実施報告

中国の音楽電子工業会、中国デジタル音楽学院および中音会社が連携し、2004年に初めて中国でMIDI検定3級試験を実施し、成功裏に終わりました。翌2005年には、「Centrmus U」と称して中国全土10都市でMIDI検定試験の教育と実習を1年かけて展開し、マーケティングと教育活動を通して更に多くの学生に対してMIDI検定試験を認知させた結果、多数の受験者で実施出来ました。

去る2005年12月には全国7都市で3級検定試験を実施し、学生の間で非常に大きな反響を得ることが出来たので、概要をご報告します。

報告 中音公司 Liu Qiang Qiang氏

第2回 MIDI検定3級試験 実施概要

実施期日：2005年12月4日（日）

●試験会場および人数比率

- ・ 杭州 (Hangzhou) 33%
- ・ 北京 (Beijing) 20%
- ・ 無錫 (Wuxi) 15%
- ・ 成都 (Chengdu) 14%
- ・ 瀋陽 (Shenyang) 12%
- ・ 天津 (Tianjin) 5%
- ・ 温州 (Wenzhou) 1%

●合格者数

223名 (合格率88.5%)
受験者数252名 / 応募者数258名

●受験者の割合

- ・ 男性46%、女性54%
- ・ 学生 87人 (34%)、
社会人 75人 (30%)、
その他 90人 (36%)



MIDIライセンスカンファレンス開催

「MIDIライセンスカンファレンス」が2005年11月25日(金)～26日(土)の2日間に亘り、大阪アップルストア2Fシアターにおいて開催されました。

この企画は、2級ライセンスとMIDI検定委員との情報交換と意見交換及び2級ライセンス同士の交流促進を目的に企画されたもので、初めての試みとなります。今回は、西日本地区のライセンス17名とMIDI検定委員(大浜和史委員長、ヤマハ(株)近藤諭弘副委員長、ローランド(株)花本真二副委員長)にAMEI事務局が参加しての実施となりました。

参加されたライセンスは、指導者(音楽教室講師、専門学校講師)52%、音楽制作に関わっている人35%で、参加者の90%はMIDI検定指導者講座を受講済みといったプロフィールでした。様々な意見交換の中で、MIDI検定2級指導者認定講座に対する要望や、将来的に1級を含めてのライセンスの体系はどうかと

いった事など、AMEIからの情報提供への期待度が読み取れ、今後の展開へ向けた貴重な時間となりました。

参加者同士の意見交換の時間を充分とる事ができなかったことが反省としてあげられますが、次回以降はこの反省を十分に生かして改善したいと思います。

次回は、今年度秋に東日本地区の2級ライセンスを対象に、東京での実施を予定しています。



メディアコンテンツ委員会 技術セミナー

『文化の多様性を支えるオーディオの将来』

メディアコンテンツ委員会
委員長 古山俊一

2005年12月21日、AMEIメディアコンテンツ委員会主催で早稲田大学国際情報通信研究科の山崎芳男教授を講師に迎えてセミナーが開催された。テーマは「文化の多様性を支えるオーディオの将来」というもので、さまざまな実例を、実演を交えてお話しいただいた。メディアコンテンツ委員会がかねてより企画し、委員の方々にとっても実現を待ち望んでいたセミナーであった。

山崎教授は音響情報処理研究の権威として高名な方であり、デジタルオーディオの分野に関しても、当初ビデオレコーダーを活用した音声のデジタル録音の実験を行ったパイオニアの一人でもある。また1ビットデジタルオーディオの研究開発の中心でご活躍され、1ビットオーディオ・コンソーシアムの代表としても著名な方である。今回の講演は単に新しい技術の紹介に止まらず、現在のオーディオ(ソフト、ハード含めて)の状況を改めて考え直す重要な内容も含む、大変有意義な講演であった。

本講演は、アナログ録音の原点であるエジソンの蝋管蓄音機の再生から始まった。エジソン蓄音機は以前にも聴いたことはあるが、保存状態の良いものを改めて聴いてみると意外に音圧があり、気づく点が多く面白い。もちろんHi-Fiという訳ではないが素直な音質で、決して「か細い音」ではなく、メリハリがあり魅力的で味のある音である。蝋管に刻まれた音の溝を針がトレースし、その振幅がホーンから音となって出力される。このような単純なアナログシステムを見て聞くことで、我々が疑いも無く受け入れてしまっている現在のデジタルオーディオの方法やシステム(マルチビットPCM方式やさまざまな圧縮オーディオ方式など)、そしてその「音」を原点に戻って再確認する必要性を感じた。

山崎教授はレコードや蝋管などの貴重な文化遺産から、非接触・非破壊での音情報の読み取りを行っている。また面白い話として、古代のパピルスなどに刻み込まれたくさび形文字などには当然刻み込む時に周りの音響による振動も加わっていたはずで、同じように、ピラミッドを建設する際に大きな石を運ぶ時にできた溝には周りの現場監督や人夫の声などが刻み込まれているはずで、これを取り出せたらというロマンというか夢のような話もなさっていた。先生の研究室では、大昔の遺跡等からの音の読み取りなど、音響考古学とでもいうべき分野への挑戦も行っている。

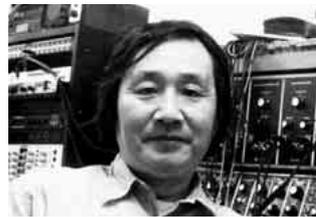


講師：山崎芳男教授

山崎先生のお話は単に技術の点に止まらず、先生独自の視点でのオーディオや音響に対する一貫した哲学に貫かれており、講演を聴く者に何の疑問もなく受け入れられていることに気がついていく。

また高速1ビットオーディオの理論の説明になると、積分などの数学を用いて大変楽しそうに数式をホワイトボードに大変なスピードで書いていき、いつもは教える側の筆者も大学生時代の気持ちに戻って「なるほどなるほど」と

うなずきながらメモを取りつつ、久々に講義を受けた感覚が懐かしかった。(高速1ビットの原理については別項で説明する。)



§ コンデンサースピーカー § 新しいスピーカーの試みとして、平面コンデンサースピーカー(数ミクロンのフィルムを振動板としエステルウールで構成されている)も紹介された。山崎研究室ではハウリングに強く均一で音の明瞭度を上げるスピーカーシステムとして、マルチセル型の平面スピーカーを提案してこられた。しかしこのシステムは高価で必ずしも効率は高くなくまた重量が重くなるため、もっと構造が単純で原理的に音への変換効率が高く1ビットアンプで駆動できるシステムを新たに提案された。

このコンデンサースピーカーには直流抵抗成分がなく、電圧と電流の位相差がほぼ90°であるため、スピーカー自体では電力は消費されない。アナログアンプを用いて駆動すると、その無効電力(注1)はアンプで消費されるが、1ビットアンプやPWM(Pulse Width Modulation:パルス幅変調)アンプ等のスイッチングアンプでコンデンサースピーカーを駆動すれば、無効電力はアンプで消費されることなく高効率で駆動することが可能である。

コンデンサースピーカーではバイオリン曲などを聴いたが、コンデンサースピーカーの特性は高域の伸びが良くサブ・ウーファーなどと組み合わせて使うとより帯域の広いサウンドが出せるだろうと感じた。とにかく通常の電磁気式のスピーカーとは鳴りが違い興味深い。壁に貼り付けて使うなど新しい設備音響システムとして使うことも考えられ、活用例は様々である。



奥がコンデンサースピーカー

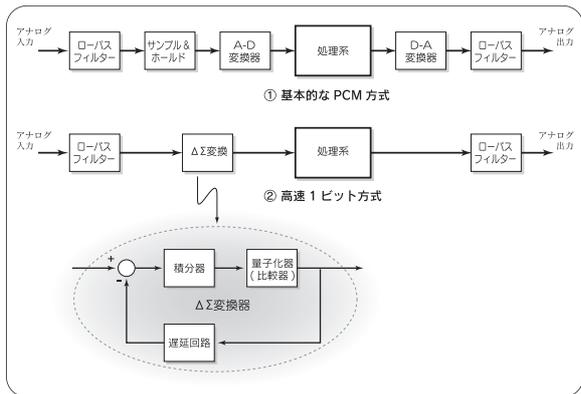
§ 高速1ビットによるサウンドを視聴 § 高速1ビットによるサウンドの実例として、2例聴くことができた。一つは8チャンネルサラウンド収録されたバッハの「マタイ受難曲」(昨年の8月5日に広島で開催された被爆60周年記念「慰霊のタベコンサート」より)である。会場は防音処理された教室であり響き部屋ではなかったが、前方3つ、後方3つ、両サイドに2つのスピーカーが配置されていた。聴いた印象は現場の会場の鳴りがとてもナチュラルに再現されていたように感じられた。コーラスと楽器群の距離感が明瞭で音の層が認識できるようであり、とても滑らかで自然な音という印象を持った。筆者自身もサラウンド録音には大変関心が高く、実際にマル

チビット(24bit/48KHz)での6チャンネルサラウンド録音は何回も経験があるが、澄んだ音のイメージは1ビットオーディオの特徴で、サラウンド録音した場合リアリティーがさらに高まるようだ。筆者も是非1ビットマルチチャンネル録音に挑戦したいし、自然音の収録を是非やってみたいと思った。

高速1ビットマルチチャンネル収録のもう一つの例として、ボーカル+ジャズコンボをリアルに再現する試みがある。これは前方のスクリーンに写されたバンドメンバーとボーカルの実際に立っていた位置にスピーカーを配置して、映像に合わせて音を再生する実験である。ボーカルを前方中央に配置し、ピアノは左奥に配置、サックスは右前方、ドラムスは右奥、ベースは中央よりやや右奥といった配置で鳴らした。映像と合わせると、視覚的にこの位置から音が出ているはずだという認識もあるので、たいへんリアリティーの高い再生方法である。ライブの中継や遠隔地への配信などに向けた再生方法であると思った。スピーカーの指向性などを調整していくと、よりリアルな音像を作り出せるだろう。

§ 高速1ビットオーディオについて § エジソンの蓄音機の時代から、音の記録はアナログである空気の波、気圧の変動である「音の波」をいかに忠実に記録していくかが重要である。デジタル化を行う場合も同じで、いかに原波形に近い状態で記録、再生できるかが重要なポイントである。CDが登場した1981年当時、山崎教授は「音がよいからデジタル化ではなく、安く丈夫だからデジタル化なのだ。」と主張されていたことが象徴的である。高速1ビットオーディオを山崎先生が提唱される理由は、アナログに近く原音を再現できるからである。

ここで高速1ビットオーディオとはどのようなものなのか説明をしておこう。一般的にデジタルオーディオといえはマルチビット方式である。16ビット、24ビットの量子化ビット数が一般的で、音声信号からAD(Analog to Digital)変換器を用いてデジタル化され、またデジタル化された信号から音声信号を取り出すためにはDA(Digital to Analog)変換器を用いる。デジタル化しさらに復号化する際に、エイリアスノイズや量子化ノイズをどう取り除くかで工夫がある。サンプリングの定理によれば完璧に音声波形が再現できるはずであるが、推量による補完や情報の間引きがあるため、原音とは違って来る。高速1ビットのA-D/D-A変換方式の違いを図からみると、要素として高速1ビット方式はシンプルである。デジタル処理系の後にローパスフィルターを用いるだけでアナログオーディオ出力を得ることができ、見た目にもすっきりした方式である。



高速1bit方式ブロック図

ポイントとなる要素は $\Delta\Sigma$ (デルタ・シグマ)変調である。これはアナログ信号や多ビット情報などを1ビットに変換する手法の一つである。積分回路と量子化誤差のフィードバック回路からなり、入力の積分と比較器の出力の積分(積分は一定時間帯での平均値と考えても良い)が一致する時が安定で、両者に差がある場合は比較器が1ないし-1を出す頻度が変化して差を打ち消そうとする。だるま落としに似て、入力と出力の差がある時にコマを一つずつ落として0まで持っていく。その結果入力信号の大きさによってパルス頻度が変化するわけだ。そして $\Delta\Sigma$ 方式は極めて高い次数のオーバーサンプリング(注2)を行うことと、方式自体にノイズシェーパー(注3)としての機能が備わっている点が特徴である。

ここで入口も出口も $\Delta\Sigma$ 変調し、極めてアナログに近い特性を持つようになる。この出力は最終的にスピーカーをドライブするためにアナログ信号に変換する必要があるが、1ビット信号はマルチビット信号と違ってDAコンバーターを必要とせず、その出力をローパスフィルターに通すだけというシンプルな処理で元のアナログ音声信号に戻すことができることも大きな特徴である。

§ 音楽文化とオーディオ技術 § またコロムビアミュージックエンタテインメント代表取締役社長兼CEOの廣瀬禎彦氏の発言を引用して語られたが、現在のネットワーク環境では、音楽などの「芸術」がネットに乗った途端に玉石混交の情報の海に溺れてしまうと話されていた。一方、インターネットが情報を伝達するメディアとして新たな需要を喚起していることは間違いない事実である。インターネットに芸術を馴染ませる解決方法を考えなくてはならないが、山崎先生の提案する考え方の一つとして、演奏者と聴く人を直接リアルタイムで結ぶ「アーティスト・ダイレクト」という構想を持っておられる。そのため山崎教授は本庄キャンパス(埼玉県本庄市)に特区の指定を受け、高速1ビットネットワークで結んだFMではないAM音楽専門のミニ放送局の実験が行われているということだ。AMというと、ちょっと聞くと音が悪いものにとらえがちであるが原理的には音の再現性は高い。このシステムも実際にどのようなものか拝見したいものである。

我々メディアコンテンツ委員会は、楽器メーカー、オーディオ系企業、電話・モバイル系企業、ゲーム制作会社など、さまざまな業種の方々が参加する会であり、我々にとってデジタルオーディオは切っても切れない存在である。今回の山崎教授の講演と実演の結果、我々が当たり前と考えて無評価で受け入れているものがいかに多いかを実感した。そして大いに刺激となった。大変意義のある講演会であった。

注1「無効電力」：実際に仕事をする電力のことを有効電力、仕事をしない無駄な電力を無効電力という。無効電力が少ないほど効率の良いシステムと言える。

注2「オーバーサンプリング」：通常のサンプリング周波数の何倍もの高い周波数でサンプリングする技術で、サンプリングノイズが高周波領域へシフトされるため、S/N特性が改善される。

注3「ノイズシェーパー」：量子化誤差を補正し、量子化ノイズを低減する効果がある。

会員名簿

50音順 2006年4月3日現在

あ	アイデックス音楽総研株式会社 株式会社アコースティック アップルコンピュータ株式会社	す	株式会社ズーム 株式会社鈴木楽器製作所	ま	松下電器産業株式会社
い	株式会社インターネット インフォコム株式会社	せ	セイコーインスツルメンツ株式会社 株式会社セガ 株式会社セガ・ミュージック・ネットワークス	み	三井物産株式会社 有限会社ミュージカルプラン 株式会社ミュージックネットワーク ミュージックノート株式会社
え	株式会社エクシング NECエレクトロニクス株式会社 株式会社エムゾーン 株式会社エムティーアイ 株式会社エンターブレイン	そ	ソニー株式会社	め	株式会社メロディーズ アンド メモリーズ グローバル
お	沖電気工業株式会社 株式会社音響総合研究所	た	株式会社第一興商 株式会社タイトー 株式会社タムラ製作所	や	ヤマハ株式会社 財団法人ヤマハ音楽振興会 ヤマハミュージックトレーディング株式会社 株式会社ヤマハミュージックメディア
か	カシオ計算機株式会社 カモンミュージック株式会社 株式会社河合楽器製作所	て	ティアック株式会社	ら	株式会社ラグナヒルズ
き	株式会社キューブ	と	東映ビデオ株式会社 株式会社ドワンゴ	り	株式会社リットーミュージック 株式会社リムショット
く	株式会社グリオ クリムゾンテクノロジー株式会社	に	学校法人片柳学園 日本工学院専門学校 日本シンセサイザープログラマー協会 学校法人電子学園 日本電子専門学校	ろ	ローランド株式会社 〈以上、正会員会社67社〉
こ	株式会社コルグ	の	ノキア・ジャパン株式会社		*賛助会員 (3社)
さ	株式会社サイバード 株式会社サミーネットワークス 株式会社三菱ギガネットワークスカンパニー	は	株式会社ハドソン パナソニックモバイルコミュニケーションズ株式会社		中音公司 (中華人民共和国) 株式会社博秀工芸 株式会社ミュージックトレード社
し	株式会社CTA 株式会社シーミュージック 島村楽器株式会社 株式会社JEUZIA 学校法人 尚美学園	び	株式会社BMB 株式会社ビクターネットワークス ビクターレジャーシステム株式会社		
		ふ	株式会社フェイス 株式会社フォーサイド・ドット・コム フォスター電気株式会社 フォステクスカンパニー 株式会社フットレック		
		ほ	ポータフォン株式会社		

社団法人 音楽電子事業協会 第10回通常総会と懇親会開催のご案内

日 時：平成18年5月10日(水) 午後4時～
場 所：ホテルメトロポリタンエドモント 2階「万里」
◇平成17年度 事業報告、収支決算報告
◇平成18年度 事業計画(案)、収支予算(案)審議 他
懇親会：ホテルメトロポリタンエドモント 3階「春琴」午後6時～
(多数の会員の皆様のご参加をお待ちしております)

AMEI NEWS Vol.29 / 2006.4.3
社団法人音楽電子事業協会 機関誌
発行：社団法人音楽電子事業協会 事務局
〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-16-9 イトービル4F
TEL.03-5226-8550 FAX.03-5226-8549
発行人：平野勝彦
編集人：福田 誠(広報委員会)
編集協力：株式会社 博秀工芸
ホームページアドレス：<http://www.amei.or.jp/>